

## 第7章

# 事例研究（1） 絵画表現ワークショップ

本章では絵画表現ワークショップの体験理解について考察する。参加者は絵を描く中で何を感じ、場を共にする中でどのような体験をしているのか。関与観察と vitality affect の感受に基づいたエピソード記述による考察を行なうとともに、ビデオ記録を基にしたトランスクリプトからのコーディング分析を併用し、考察と分析結果との比較検討を行なう。

### 1. 絵画表現ワークショップについて

このワークショップは、筆者らが企画した「子どもアート・カレッジ 2012」の七つの連続講座の第一回講座である。実施に当たっては学生ボランティアが具体的な活動内容を企画し、準備から当日の運営までを行なった。活動名を「のびのび描くドローイング—心が色に溶け出す日—」として、絵画表現の活動を企画した。5メートル四方ほどの大きなダンボールを床に敷いて海に見立て、足や手、刷毛やローラーを使い、たくさんの絵の具で描いていく。今回は絵を描くことの技術講習ではない。全身で絵の具と一体となって描くことを楽しむ体験を味わってもらうことを意図して企画した。このように描かなければならないという方向づけや、表現の巧みさなどの評価はしないという考えで行なっている。その点では参加者一人ひとりが、または参加者同士で、絵画表現をいかに体験していくかというプロセスの創造自体が探究される活動であると言える。まさに高橋（2011）が言うところの、「造形の楽しさを誰もが享受できることを目的としておこなわれる」（p. 20）



図 7-1 制作風景

差し当たっては「ワークショップとしか言えないワークショップ」(p. 20)の実践だと言える。

楽しく絵画表現に取り組む子どもの姿が予想されはするが、それが実際どのように体験されるかは始まってみなければ分からない。もちろん参加者が発達のどのような姿を見せるかを調査するわけではない。一人ひとりの絵画表現との向き合い方は異なるであろうし、そうした中で参加者がどのような体験をするのかを予断を排して捉えていく。

## 2. 事例研究の概要

### (1) 事例の概要

- 活動名：のびのび描くドローイング—心が色に溶け出す日—
- 実施日：2012年X月X日10：00-12：00
- 会場：福岡県内公共施設
- 参加者：3～9歳の幼児・児童（13名）
- スタッフ：筆者（主催者・観察者）、団体メンバー1名（記録）、学生ボランティア3名
- 助成：独立行政法人国立青少年教育振興機構子どもゆめ基金

○倫理規定：申し込み時に研究目的で記録を行なうことを文書にて説明し、同意を得て参加してもらっている。当日も説明を行ない、撮影や協力はいつでも拒否できることや、公開に際するプライバシー保護等を説明し、承諾を得て行なった。

## (2) 研究方法

筆者は主催者兼スタッフの一人として関与しつつ観察を行なった。記録方法は固定ビデオカメラ（一部移動）とデジタルカメラでの撮影である。途中でメモをとる余裕はなく、終了後に印象に残った出来事をメモに書き起こし、エピソードに書き改めた後でメタ観察（省察）を行なった。その後にビデオ記録から発話を文字起こししたものに参加者の行為や様子を書き込んだトランスクリプトを作成し、M-GTAに依拠してコーディング分析を行なった。今回は連続講座の初回ということもあり、準備や実施体制が十分ではなく、ワークショップとしては以下のようにいくつかの点で厳しい展開となった。

- ・スケジュールの都合でスタッフ間の十分な事前最終打ち合わせができない
- ・講座の内容に対してスタッフ数が少ない
- ・汚れ対策、時間、水場確保などに使用会場の管理上の難しさがある
- ・上記の問題から参加者に実施後の感想を聞き合う時間がとれない
- ・スケジュール上の理由で実施直後のスタッフの振り返りができない

初回の本講座のみこうした条件が重なり、多くの情報源を活用してワークショップの体験を分析・考察していくことが難しい状況となった。スタッフが少ない中、筆者も観察しつつ実働スタッフとして終始慌ただしく活動した。

## (3) ワークショップの概要と展開

Phase1：活動は2時間であるが、当日の準備も手一杯で、準備が終わる前